様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月　 ３ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２５９５

研究課題名（和文）バンド・デシネ理論の多様な変遷に関する研究

研究課題名（英文）Study on the wide diversity within French comics theory

研究代表者
古永　真一（Furunaga, Shinichi）

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：００７０６７６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本申請研究では、これまでの申請者の研究成果をふまえつつ、バンド・デシネがフランス語圏においてどのように研究されてきたのかという問題について、記号論やナラトロジー、映画学、精神分析、社会学、さらにはアダプテーションやホロコーストといった重要なテーマによるバンド・デシネ研究を調査してその要諦を明らかにし、バンド・デシネ理論の多様な変遷を再構成することによって、マンガ研究やフランス文学研究におけるバンド・デシネ研究の意義を明らかにすべく調査を行った。具体的には、「ホロコーストとマンガ表現」、「バンド・デシネとアダプテーション」と題した二本の論文を執筆して発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本申請によるバンド・デシネ理論の変遷の研究は、マンガの大衆文化としての魅力や芸術性についてフランス語圏の研究者がどのように取り組み、真摯な探究を積み重ねてきたのかを明らかにするだけでなく、日本のマンガ学やフランス文学研究にも寄与することが期待できる。というのも、フランス語圏の人文科学においては、良き伝統として理論を徹底的に構築し、分析の道具とすることに重きを置く傾向があるからである。また、本研究で得られた知見は、マンガや文学だけでなく、映画やアニメーションといったポピュラー・カルチャー全般にも応用可能であり、さまざまなフィールドにとって有効な成果をあげることができると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this research, based on the results of the applicant’s research thus far, the issue of how French comics have been studied in French-speaking countries is discussed, including semiotics, narratives, cinematography, psychoanalysis, and sociology. Furthermore, by studying French comics research from important viewpoints, such as adaptation and the Holocaust, and by clarifying key points and reconstructing various changes in French comics theory, this research attempts to clarify the importance of French comics theory in manga research and French literature research. As a result, I wrote and published two papers titled “The Holocaust and Comics” and “French Comics and Adaptation.”

研究分野：表象文化論

キーワード：バンド・デシネ　マンガ　フランス文学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

申請者はバンド・デシネと呼ばれるフランス語圏のマンガに関心を持ち、数年にわたって仏語圏の作品や研究書、論文を翻訳し、自らも研究書を出版し、大学や学会のシンポジウムや書店のトークイベントで取り上げるなどの活動を続けてきた。もともと日本では、一部のアメコミを例外とすれば海外マンガの紹介があまり進んでいないという状況があり、折しもグローバル化の波がマンガの分野にも押し寄せてきたという背景もあって、フランス語圏のマンガに興味をもつ日本人の読者や編集者や研究者の数が増えていた。他方、日本でもマンガ学という形でマンガ研究は続けられてきたが、本格的にアカデミックな研究に勤しむ研究者が増えてきたこともあり、そこで海外マンガが脚光を浴びるということもあって、研究環境は整いつつあった。また、フランス文学研究においても、小説を中心とするような従来の枠組みから逸脱するようないわゆる表象文化論的な研究を行う研究者も出てきていた。ちなみに申請者もフランスの思想家ジョルジュ・バタイユに関する論文で博士号を取得したが、バタイユがバンド・デシネを題材に書いた論考がきっかけとなって、バンド・デシネについて本格的に研究してみようと思い立った経緯がある。要するに、研究開始当初の背景を一言でまとめれば、マンガ研究は日本マンガ研究から世界マンガ研究へと変化する時期にさしかかっていたといえる。

申請者は科研費においても過去に奨励研究を行う機会に恵まれ、この分野の研究に励んできた。一方、文化庁メディア芸術祭のマンガ部門の審査を務めさせていただく機会があり、世界のさまざまなマンガ作品に触れ、各種イベントのモデレーターの業務を通じて、日本や英語圏のマンガ理論にも研究の範囲を広げつつ、フランス語圏のマンガ研究にますます強い興味を抱くようになった。一言でマンガと呼ばれている表現形態にかくも多様な作品が存在していることは、マンガという一分野の問題にとどまらず、イメージ・テクスト研究という観点からしてもたいへん興味深い分野であると感じられた。イメージのシークエンスで物語を進行させるということ、そこには言葉が介在するのが一般的だが、仮に言葉が無くてもマンガが成立するということ、さらにはコマ割りという物語分節の技術の精妙さ、フキダシというマンガ独特の慣習のもつ効果……などマンガという表現手段の興味深さを挙げていけば枚挙に暇がない。繰り返しになるがマンガ理論には、イメージ・テクスト研究という枠組みにおいても示唆に富む知見が日本のみならず世界各地に蓄積されており、とりわけ理論的探究の学術的伝統においては定評のあるフランスの文学・芸術研究に注目すべきだと再認識するに至り、そのような背景をもとにして本研究を申請するに至った。

２．研究の目的

マンガというメディアの特異性や魅力を分析するうえで、独自の存在感を持つフランス語圏においてバンド・デシネと呼ばれるフランスのマンガはどのように研究されてきたのか、どのような領域を横断し、またいかなる独自の領域を切り拓いてきたのか調査するのが本申請研究の目的である。「芸術」大国とされるフランスにおいて第九芸術と呼ばれるバンド・デシネについて、その「芸術性」や「文学性」という概念を歴史的なアプリオリに鑑みて相対化したときに、「娯楽」としての性質はどのように考察されてきたのか、あるいは考察されてこなかったのかという問題も考慮しつつ進めることが、本申請研究の眼目となる。換言すれば、相対的に他の表現領域ほど学問として制度化されてこなかったバンド・デシネ研究が、他の人文科学の知のフィールドとどのような関わりを持ちながら、道なき道を切り拓いてきたのかを探究することが、本申請研究の目的だとも言えるだろう。そうした問題意識の背景には、日本においてマンガというジャンルの存在感が出版界のみならず人文科学のフィールドにおいても存在感が高まってきていることがある。日本マンガ学会は活発な活動を展開し、マンガ研究において貴重な成果はマンガの研究家のみならずフランス文学者からも発信されるようになっている。にもかかわらず、日本においてフランス語圏のマンガ研究は日本のマンガの研究に比べると手薄な感は否めない。マンガの多様性やグローバル化した現実に鑑みれば、バンド・デシネ研究を日本においても活性化することは、マンガ研究一般において有益かつ必要な知的な刺激をもたらすのではないかと期待される。本申請研究がバンド・デシネの批評理論の多様性や変遷に着目したのはそうした時代背景や研究環境の変化がある。

３．研究の方法

バンド・デシネを直接もしくは間接的に論じているフランス語、英語、日本語の文献を選定して収集する。ウェブサイトで公開されている情報や論考も能うかぎり調査し、その内容を系統的に整理し、どのような観点からいかなる評価や考察を行っているのかを見極め、全体の流れを把握した。こうした文献調査からバンド・デシネに関わる議論や関心の高いテーマをいくつか選び出し、論文という形でまとめて発表した。本申請研究では、文献調査を深めるうちにホロコーストとアダプテーションという二つのテーマが考察を深めるのに値することが判明した。ホロコーストはヨーロッパの芸術や娯楽表現におけるタブーという問題に関係し、かつ未曾有の世界史的な出来事という意味でのいわゆる表象不可能性の問題、そこに伴う表現者の倫理や自粛、制

度的な検閲の問題を提起する。マンガという図像を扱うメディアがそのような問題といかに対峙したのかを明らかにするのは、バンド・デシネの批評理論を調査するうえでいわば一つの突破口となると考えられる。また、アダプテーションというジャンルを越境する主題系は、マンガと隣接する映画や文学の表現との比較において示唆に富む研究が多数発表されており、バンド・デシネを特集した論文集も刊行されている。言語中心であった文学のナラトロジーを再考するうえでも示唆に富む文献が数多く見受けられる。また、第七芸術である映画の理論や文学理論、社会学や精神分析の知見がバンド・デシネ研究では活用されており、昨今の活発な研究状況という国際的な潮流からすると、アダプテーションというテーマはバンド・デシネの批評理論を調査するうえでも看過できない知的な鉱脈となると判断した。

４．研究成果

研究費が支給されることで幅広い文献収集が可能となった。とりわけフランス語や英語圏におけるマンガ研究についての知見を深めることが可能となり、バンド・デシネの批評理論の多様性や変遷を把握するうえで大きな助けとなった。また、マンガだけにとどまらず、隣接する分野や批評や思想のフィールドにおいて、どのような議論が展開されてきたのかを知ることができた。そうして得られた知識や情報を糧として、「ホロコーストとマンガ表現」(2019)と「バンド・デシネとアダプテーション」(2020)と題した二本の論文を申請者が勤務する大学が発行する『人文学報』という媒体に発表することができた。前者はホロコーストという世界的にも未曾有の出来事に対して、マンガがいかなる表現を試みてきたのか、またどのような論議を巻き起こしたのか、そのような経緯を踏まえたときにマンガ表現にはどのような特性があるのかという問題について論じた。後者は、アダプテーション研究の現況を確認した後、メルヴィルの小説『白鯨』と映画版との比較を参照しながら、カミュの小説『異邦人』とバンド・デシネのヴァージョンを比較してバンド・デシネの可能性を新たに探る試みを展開した。いずれにしても、本申請研究で培った知見や入手可能となった資料が大いに役立ち、論文の完成に不可欠な寄与をもたらした。また論文執筆だけでなく、その過程で得られたさまざまに資料や人的交流にもとづく知見は今後の研究活動のうえで大いに励みになり、また糧となったことを申し添えておきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 古永真一	４．巻 No.515-10
２．論文標題 ホロコーストとマンガ表現	５．発行年 2019年
３．雑誌名 人文学報	６．最初と最後の頁 69-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 古永真一	４．巻 No.516-10
２．論文標題 バンド・デシネとアダプテーション	５．発行年 2020年
３．雑誌名 人文学報	６．最初と最後の頁 11-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考